

フットボール (ラグビー・アメフト) における 脳震盪からの競技復帰に関する現状と課題

○中山 晴雄 (なかやま はるお)^{1), 2)}, 川又 達朗²⁾, 荻野 雅宏²⁾, 福田 修²⁾, 成相 直²⁾,
野地 雅人²⁾, 谷 諭²⁾, 平元 侑¹⁾, 岩渕 聡¹⁾, 永廣 信治²⁾

¹⁾ 東邦大学医療センター大橋病院 脳神経外科

²⁾ 日本脳神経外傷学会 スポーツ頭部外傷検討委員会

スポーツ医学の進歩とともに、近年スポーツに関連した脳振盪に対する注目が集まっている。なかでも、脳振盪からの競技復帰に関しては競技者本人だけでなく、診察を担当する医療従事者、指導者、未成年の選手の場合は保護者を含む多くの関係者の共通認識が必須な問題である。

これまで、スポーツ頭部外傷における脳振盪の競技復帰に関しては、アメリカ神経学会が提案した分類による指針が用いられることが多く、多くの脳振盪発症競技者は受傷当日に現場復帰を果たしてきた。しかしながら、セカンドインパクト症候群や慢性外傷性脳症などの問題が指摘され、近年脳振盪からの競技復帰に関しては、スポーツ脳振盪国際会議を筆頭に各種競技団体から相次いで、当日復帰を認めない指針が提示されている。加えて、実際の競技復帰に際しては「段階的競技復帰」が提示され世界的にも広く認識され始めている。

しかしながら、本邦においては、これまでスポーツ頭部外傷における脳振盪からの競技復帰に関する明確な指針は示されておらず、昨今の社会的事情も併せて鑑みると明確な指針が必須である。

これに対し、日本脳神経外科学会ならびに日本脳神経外傷学会では、スポーツ頭部外傷検討委員会において、本邦におけるスポーツ頭部外傷に対する脳神経外科医の対応を標準化するべく、スポーツ頭部外傷に対する提言を編集し、広く啓蒙を進めている。

本報告では、この提言があたえるフットボールにおける脳震盪からの競技復帰への影響とそこから見える課題について検討し報告する。